幼年教育研究年報　第46巻　13－20
The Annual Research on Early Childhood, 2024

保育者としての経験にもとづく保育研究の方法論的検討
―「オートエスノグラフィー」と「エピソード記述」を中心に―

本　岡　美保子[1]

Methodological Considerations in Childcare Research Based on the Experiences of a Childcare Provider
：Focusing on “Autoethnography” and “Episodic Description”

Mihoko MOTOOKA[1]

Abstract: This study aims to offer methodological suggestions for childcare research based on the experience as a childcare provider, through an analysis of methods reported in earlier research, particularly that using Autoethnography and episodic descriptions. This study was conducted, because while the research value of what can be sensed only by being present in childcare settings as a childcare provider has been recognized, various doubts about the method have been expressed. The research methods are classified into four categories whose methodological characteristics and associated issues are examined to identify problems in the research based on the author’s own experience as a childcare provider. First, when writing inter-subjectively, the relationship between descriptors and research collaborators is important; second, when writing subjectively, it is necessary to distance oneself as a researcher from subjectivity as a childcare provider to avoid becoming self-righteous; and third, it is necessary to clearly state why it is academically significant to base research on the experience as a childcare provider. Although the fact that the researcher is also the analyst raises concerns regarding the self-righteousness of childcare research based on childcare providers’ experiences, new possibilities for childcare research are revealed, including analyses taking advantage of the identity of the researcher and analyst and the physicality of being a childcare provider.

Key words: Autoethnography, Episodic Description, Childcare Research, Experiences as a Childcare Provider, Methodology

背景と目的

近年，保育学分野の研究（以下，保育研究と表記）において質的研究は市民権を得た（中坪，2017）と評されるほど増加し，保育者による省察的な研究も多数発表されてきた（大豆生田，2018）。保育における精神的なものの現れを理解するには主観性が重要である（榎沢，2018）ため，保育者としての経験を有する研究者（以下，保育経験を有する研究者と表記）が，保育者としての自身の主観性を捨象せずに記録したものを用いて，研究を行っていると考えられる。本稿では，こうした保育者としての経験にもとづく保育研究を取り上げ，その方法について検討を行いたいと考える。それは，保育者として保育の場に臨むからこそ感じ取られることに対する研究的価値が見出されながらも，方法に関する様々な疑念が示されてきたからである。

例えば，保育の省察を重ねた津守真（1926–2018）の研究に対しては，津守の前理解によって捉えられるものだけが研究として浮上していることが批判されてきた（鳥光・北野・山内・

1　比治山大学　現代文化学部

中坪・小山，1999)。逆に言えば，津守自身の保育思想という前提があるからこそ成り立つのであって，保育思想も含めて読者に吟味されることになる。しかし，保育者としての経験にもとづく保育研究に，全てそうした思想的背景があるわけではなく，保育者としての経験と主観の，単なる羅列になってしまう恐れもある。貧弱な事例と思いつきの思弁という組み合わせになりかねない（無藤，2013）のである。思想的背景の有無の是非は抜きにして考えても，主観性を捨象しないということは，事例選択の偏りのみならず，保育経験を有する研究者の保育観が，研究結果にも影響を与えてしまうことにもなり，独善的になることへの懸念は否めない。これらを防ぐためにも，方法論の検討は不可欠であると考える。

保育研究に限らず，主観性をどう扱うかという問題は，かねてより議論されてきた。質的研究は，データ解釈に恣意性や主観性が混入しやすいことが短所（やまだ，2020）だと考えられており，主観性を捨象しないという時点で，自己の経験にもとづく研究は通常の質的研究よりも，さらに客観的な分析が求められていると言えるだろう。この問題に関して大谷（2019）は，ある程度定式化された分析手続きによって客観化がなされることにより，主観のみによる恣意的な分析を抑制できるとし，分析者による省察可能性があることと，読者による反証可能性があることの二つが必要であると述べている。そのためには，分析過程を明示するなど，研究プロセスを透明化する必要がある（西條, 2005)。

このようにして研究を行うことで，主観性を捨象せずとも，保育者としての経験にもとづく保育研究を，研究として成立させることは可能であると考えられるが，研究方法を詳細に見ていくと，さらなる課題があることがわかる。例えばオートエスノグラフィー（autoethnography，以下 AE と記載）による保育研究は，分析的側面の弱さが指摘されてきた（濱名，2018)。AE とは，自らが有する文化（own culture）を理解することを目的とした記述的研究（土元・サトウ，2022）のことであり，自己の感情を振り返り呼び起こす内省的な行為を通して，文化的・社会的文脈の理解を深めていく研究手法である（井本，2013)。AE のような当事者性にもとづく実感や体験世界を描く研究には適さない，モデル化をめざすような分析方法がとられている研究もあり（濱名，2018)，分析方法も含めた方法論を議論する必要がある。

また，現象学的基盤をもとに鯨岡（1943- ）によって考案され，実践に関与する自らの主観性を根拠として理論を構築する方法（山竹，2015）としても使用されてきたエピソード記述に関しても, 数々の疑問が投げかけられている。エピソード記述は通常，背景，エピソード，考察（メタ観察）の３つに分けて記述され，記述者の心が揺さぶられたことを契機として描かれる（鯨岡，2013）が，心が揺さぶられたことがない限り記述することはできない（安部･吉田，2021a)。すなわち，心が揺さぶられることがエピソード記述による保育研究の条件となってしまっている。

さらに，考察（メタ観察）の方法に関する言及がないことや（安部･吉田，2021a)，エピソード記述の肝ともいえる間主観性が吟味されておらず，保育者による一方的な子ども理解に留まるおそれがある（安部・吉田2020；安部・吉田，2021b）といった批判もある。たしかに鯨岡（2006）も, エピソード記述の中心概念である「間主観的に分かる」ということに関して，解釈や推論ではないとしながらも，間主観的に分かることとしっかり分からないことを包括した概念であるとし，受け止めることが重要だという議論にすり替えてしまっている。こうした間主観性に対する定義の揺れも，記述者の思い込みではないかという疑念につながっているのではないだろうか。

記述者の思い込みではないかという疑念に関しては，エピソード記述に限らず，エピソード記述を含む現象学的な研究全般に対する批判でもあるだろう。これまで現象学的な研究においては，記述者自身の心に現れることを記述し，後から振り返って意味付け直すこと（木下，2007）や，進行中の出来事が自らの中で一旦終了したのちに想起し，心理的時間的距離をおいて意味を言語化すること（藤井，2012）など，経験から時間を置いて分析的に記述するという方法がとられてきた。しかし，なぜそのような分析的記述になるのかといった思考の流れをどの程度記述するかは記述者に任され，記述そのものも個人の能力に依存している。名人芸と言われてしまう所以でもあるだろう。

以上，先行研究で整理されてきた，保育者としての経験にもとづく保育研究の方法論的課題を整理したが，単に主観性を捨象しないというだけで括ることはできない研究の広がりと，課

題があることがわかる。保育者としての経験にもとづく保育研究は，まだ緒についたばかりであり，研究方法に対する具体的な検討が追いついていないといえるだろう。保育研究に限ったことではないが，AE をとってみても，当事者による主観的な研究という単純化された理解に陥っている（土元・サトウ，2022）という現状があり，客観性のない研究として一括りにされてしまう恐れと常に背中合わせである。つまり，それぞれの研究方法に関して，その方法論の全体を掌握しつつ課題を整理し直すことで研究方法をより精緻化し，方法論として練り上げる必要があるのではないかと考えられるのである。

そこで本研究はその一歩として，保育者としての経験にもとづく保育研究の方法，とりわけ AE とエピソード記述を用いた研究に関してその方法を分析し，比較・検討することで，方法論的示唆を得ることを目的とする。

比較対象として AE とエピソード記述を取り上げるのには，二つの理由がある。一つは，AE が，個人的経験をもとに文化・文脈を理解するという広がりがあるのに対し，エピソード記述では，感じとられたことをもとに現象そのものに焦点化していくというというように，研究の向かう先が相反しているにもかかわらず，どちらも主観的な研究として括られがちであり，その差異に注意が払われていないからである。二つ目は，どちらの研究方法も，近年の保育研究の中で使用され始めているが，前述したような批判や検討すべき課題が山積しているからである。

研究にあたっては，後述する土元・サトウ（2022）による４類型の枠組みに依拠してそれぞれの研究方法ごとに分類し，各類型の方法的特徴と課題から，保育者としての経験にもとづく保育研究全体の課題に迫りたいと考える。なお本研究における保育者とは，職業として保育に従事する者に限らず，保育実践に関与する者とする。また，保育経験を有する研究者とは，保育者としての経験を有する論文筆者のことを指し，筆頭筆者であるか否かは問わない。

研究方法

１．研究の対象

国立情報学研究所が運営するデータベース「CiNii」を用いて，2023年３月までに論文化された AE 及びエピソード記述による保育研究を抽出した。具体的には，検索ワード「AE　保育」「自己エスノグラフィー　保育」及び「エピソード記述　保育」によって探し当てた論文から，レビュー論文や雑誌記事，実践記録のみのもの，保育経験を有する研究者の保育経験の記述ではないもの，書かれた AE やエピソード記述が直接分析対象ではないものなどは除き，研究の対象とした。さらに，探索的に対象論文を探し当てて追加した。研究１として AE による保育研究，研究２としてエピソード記述による保育研究に関する分析を行う。

２．分析方法

土元・サトウ（2022）による４類型の枠組み（図１）を援用して，分析を行う。これは AE が，当事者による主観的な研究であるという過度に単純化された理解によって，どのような人間理解を目指している方法論なのかという本質的な点が理解されにくくなっているという問題意識のもとに作られたものである。縦軸に「個別性理解」－「他者・共通性理解」を両端に配した〈姿勢〉の次元，横軸に「主観的著述」－「相互主観的著述」を両端に配した〈著述〉の次元による，４象限によって構成されている。この枠組みを用いることで，AE による研究の全体像を理解することが可能となる（土元･サトウ，2022）。

エピソード記述による保育研究の分析においてもこれを援用するのは，記述者の視点によって描かれる世界が異なる（本岡，2020）というこれまでの理解では，記述者の視点によって研究の射程が限定されるかのように，方法論の持つ可能性が矮小化されて理解される恐れがあるためである。〈著述〉と〈姿勢〉という関係からエピソード記述による保育研究全体を捉え直すことで，エピソード記述の方法論としての可能性を示すことができ，方法論全体の理解を深

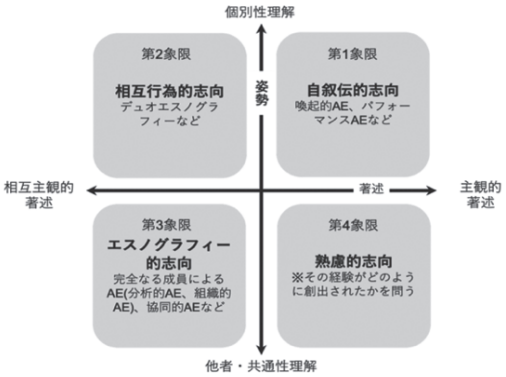

図１．４類型の枠組み（土元・サトウ，2022）

めることができると考えた。また，同じ指標を用いて比較検討することで，２つの研究方法論それぞれの課題に気づくことができると考え，これを採用した。

以下，土元・サトウ（2022）の４象限について詳述する。第１象限は「自叙伝的志向」であり，研究者独自の視点を重視して記述し，その人の個別的な側面を理解しようとする研究が該当する。第２象限は「相互行為的志向」であり，他者と共にある特定の経験を探究し，相互主観的著述を行うことによって，その経験を理解しようとするものである。相互主観的著述とは，他者と共に，あるいは他者を介して自己の経験を語るという相互行為にもとづく著述を意味している（土元・サトウ，2022）。これは，第３象限の「エスノグラフィー的思考」と同様であるが，第２象限ではその経験の個別性に対する理解を志向しており，第３象限では，他者理解や研究者同士の共同のテーマに対する理解を志向しているという点が異なる。第４象限は「熟慮的思考」であり，主観的な経験の精緻な理解を通して，他者や心理的プロセスの共通性理解を志向する研究などが該当する。

以上にもとづいて，研究１では AE，研究２ではエピソード記述による保育研究を検討する。

結果と考察

１．AE による保育研究

該当した論文は８本あり，図２のように分類された。

主観的著述によって個別性の理解を目指す第１象限は，自己陶酔的になりやすく（岡田・中坪，2008），徹底的に吟味できないといった自己分析であるが故の限界もある。そこで岡田・中坪（2008），岡田（2014）は，佐藤（2008），木下（2007）の質的データ分析法をもとに分析を行っている。しかしそのことにより，ストーリーとして読み取れなくしてしまっている（濱名，2018）との批判もある。また，個別性が最も高い第１象限の場合，なぜ自己を対象とするのかという理由が明確に示されていなければ，保育者としての経験をもとにすることそのものが研究的価値になり，研究目的に鑑みてこの方法が妥当であるのか疑問が生じてしまう可能性もある。なお，岡田・中坪（2008）は，共同研究ではあるものの，AE そのものは第一筆者の主観的著述であったため，第１象限に配置した。

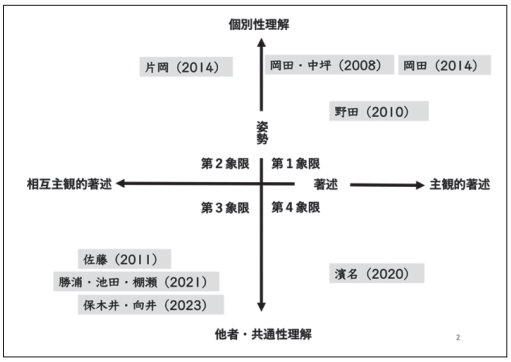

図２．AE による保育研究

研究協力者との相互主観的著述によって個別性の理解を目指す第２象限は，第１象限と同様，なぜ自己を対象とするのかという理由が明確でなければ，その個別性の理解を志向する意義が見出せない恐れがある。また，研究協力者との関係性が，研究の妥当性に影響を与えうる点を注意する必要もある。片岡（2014）は，メンターとして保育者と関わった自身の経験を，保育者の語りをもとに AE に描くことで，メンタリングの重要性を描き出した。しかしそこには，メンターとメンタリングを受ける保育者という非対称的な関係があるため，メンターには気づきにくいメンタリングに対する別の視点や，メンターへの否定的な考えは出にくかったのではないだろうか。第２象限においては，研究協力者との関係性が研究結果に大きく関わりうること，個別性の理解がどこまで学術的意義を持つかを丁寧に吟味していく必要があるだろう。

相互主観的著述によって他者・共通性の理解を目指す第３象限は，個人内にとどまらない，現象の深い理解を目指したものである。第２象限と同様，研究協力者との関係性が研究の妥当性に影響を与えうるという課題を含んでいると言える。保木井・向井（2023）では，第一筆者と第二筆者が利害関係のない関係であることなどを詳述することで研究の妥当性を高め，保育者が自分語りを振り返ることの意義を述べた。第３象限におけるその他の課題として，相互主観的著述であることによって，通常のインタビュー研究との違いが見えにくくなる恐れがあることがあげられる。自己を通して現象をまなざすという AE の良さを活かすためにも，相互主観的著述によって描き出すことの必然性を記述する必要がある。

主観的著述によって他者・共通性の理解を目指す第４象限も，第１象限と同様に主観的著述であるため，分析枠組みが明示されていない場

合は安易な自己分析になる恐れがある。そこで濱名（2020）は，プロセスを描きだす方法として用いられてきた複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: TEM）（サトウ・安田・木戸・高田・ヤーン，2006）によって分析し，新人保育者の意識変容を描き出した。ただし研究目的がプロセスではなく，その時の意識を深く掘り下げて描き出すことであった場合は別の分析枠組みが必要であり，今後さらに分析枠組みを検討する必要がある。

２．エピソード記述による保育研究

該当した論文は９本あり，図３のように分類された。

エピソード記述はそもそも，子どもの思いを間主観的に把握することで描き出されていく側面があるため，すべての著述が相互主観的と言えないわけではないが，本研究の分類にあたっては，執筆者同士によって相互主観的に著述されたか否かによって判断した。

第１象限の山崎（2010），本岡･七木田（2018）では，複数のエピソード記述を対象に考察を重ねていくことで子どもの変容過程を示し，福永・仁科（2022）では，１つのエピソード記述を詳細に記述することで子育て支援の実際を描いた。これらの研究は，保育経験を有する研究者が感じ取ったことが根拠であるために，研究者としての「私」と保育者としての「私」との境界が見えにくく，読み手によっては独善的だと見做される恐れがある。エピソード記述による研究は，読み手による了解可能性によって研究の妥当性を担保しており（鯨岡，2013），裏を返せば，研究が読み手を選ぶことになりかねない。なお，本岡・七木田（2018）及び福永・仁科（2022）は共同研究ではあるものの，エピソード記述そのものは主観的著述であったため，第２象限に該当するものはないと判断した。

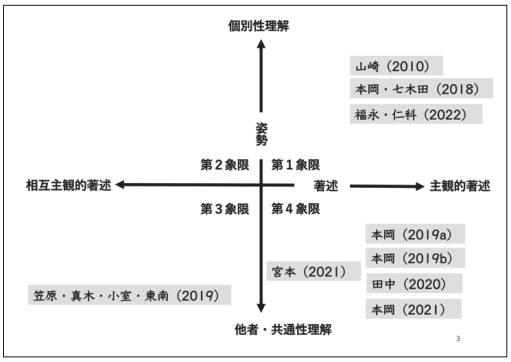

図３．エピソード記述による保育研究

第３章限の笠原･真木･小室･東南（2019）は，保育経験を有する研究者らによるエピソード記述をもとに，幼児の造形活動において「もの」が担う役割と意味を提示し，「もの」が媒介することによる造形活動の意義を示した。エピソード記述は１人ずつ書いていると思われるが，カンファレンスの後に考察が書き加えられているため，相互主観的著述と判断した。本研究では論文を扱ったために該当するものは１本であったが，複数人の保育者によるエピソード記述を考察する書籍も多数存在する（室田，2013など）。エピソード記述をもとにカンファレンスを行ったり（岡花・杉村・財満・松本・林・上松・落合・山元，2009），カンファレンス後にリライトしたりすることで，保育実践の奥深さや多様な視点を提供することができるためではないかと考える。

第４章限の宮本（2021）は，保育経験を有する研究者と子どもとのかかわりではなく，子ども同士のかかわりにおける子ども視点でのケアを描き出した。エピソードになった出来事に対する直接的な関与がないため，他の４本に比べると省察的な要素はなく，独善的な印象にはなりくい。一方，本岡（2019a，2019b，2021）では，保育経験を有する研究者と子どもとのかかわりの記述であるため，独善的になることを避けるために時間を置く，分析枠組みを提示するといった対処をしている。しかし，AE の第４象限の研究が別の質的研究においても使用されている分析枠組みを採用しているのに対し，独自の分析枠組みを用いており，分析の妥当性が担保されているとは言い難いだろう。

総合考察

ここまで，保育者としての経験にもとづく保育研究の方法として，AE とエピソード記述を用いた研究を取り上げて分析し，分類された象限ごとの特徴と課題を述べた。総合考察ではこれらをもとに，保育者としての経験にもとづく保育研究における方法論的示唆を提示する。

第１に，相互主観的に著述する場合，記述者同士や研究協力者との関係性が重要であることである。AE 研究においては，利害関係等のない対称的関係であることが研究の妥当性に関わることを述べたが，エピソード記述における研究おいても同様であると考える。語り合いや相互行為が著述の内容に反映され，それが研究の結果と直接的に結びつくからである。理論枠組

みの違いがあるにせよ，質的研究において自己を語ることが，関係性や協働性と切り離し難い（小山，2017）ように，保育者としての経験にもとづく研究においても，記述者同士や研究協力者との関係性が重要であると考えられる。

第２に，保育者としての主観性から，研究者として距離をとることで，独善的になることを防ぐ必要があることである。その場合に，AE 研究でもなされていたような，他の研究で用いられる分析枠組みを使用するというのは一つの方法であることは前述したとおりであるが，研究目的にあった分析枠組みの選択及び，その分析枠組みの妥当性を検討する必要があるだろう。とりわけ，第４象限のように主観的記述をもとに他者・共通性理解を目指す研究の場合には，一人の主観による過度な一般化に陥る可能性もある。土元・サトウ（2022）においても，第４象限に該当する AE 研究の方法論に関する議論は不十分とされており，保育研究においても同様だと考える。主観的著述の場合は，経験者と分析者が同一人物であることによる独善性が危惧されるものの，むしろ同一人物であることを利点として活かしつつ，分析者として自己の経験とどう距離を取るかということが重要になるだろう。

そのための方法として，近年では個人の経験を掘り下げる分析枠組みである TAE（Thinking at the Edge，以下 TAE と表記）（Gendlin，2004）を用いた研究も見られるようになった。TAE とは，うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を言語感覚と相互作用させながら精緻化し，新しい意味を生み出していく系統立った方法のことである（得丸，2010）。例えばアレン玉井（2015）は，TAE を用いて英語講師としての自身の経験を分析している。保育者は自らの身体を用いて子どもと日々対話しており，保育研究においても，保育者の実感として感じ取られることを自身の身体感覚と言語との相互作用によって言語化することは可能であると考えられる。保育者としての身体性を生かした分析に，保育者としての経験にもとづく保育研究への援用可能性を見出すことができるだろう。

第３に，学術研究に用いることの意義を明確に記述する必要があることである。AE は，学術研究以外に詩やアートなどとして発表されることもあり（Valsiner，Tsuchimoto，Ozawa，Chen & Horie，2021），エピソード記述は，実践報告やカンファレンス，実習指導等にも幅広く使用されている。学術論文である以上，保育研究としての学術的な意義が不可欠である。保育者としての経験を扱うことに，学術的にどのような意義があるのか，また，研究目的に照らして妥当な方法であるのかを，詳述する必要があるだろう。と同時に，保育者としての経験にもとづく研究には，別の方法では知り得ないことが分かる可能性があることも，積極的に示していくことも重要だろう。

本研究では，AE による保育研究とエピソード記述による保育研究を比較検討するため，土元・サトウ（2022）による４類型の枠組みを用いた。そのため，保育経験を有する研究者特有の主観性のありように関しては検討しなかった。今後は，AE とエピソード記述以外の，保育者としての経験にもとづく研究も含め，保育者，研究者という２つの立場を持つが故の主観性に着目した検討を行うことで，保育者としての経験にもとづく保育研究全体の特徴を提示したいと考える。

付　記

本研究は，日本子ども社会学会第29回において発表したものを加筆，修正したものである。

引用文献

安部高太朗・吉田直哉（2020）鯨岡の「接面」の心理学における保育関係の非対称性．第30回日本乳幼教育学会発表要旨集．26-27.

安部高太朗・吉田直哉（2021a）保育者によるエピソード記述の契機としての〈感動〉－鯨岡峻の場合－日本教育学会大會研究発表要項，**80**(0)，49-50.

安部高太朗･吉田直哉（2021b）鯨岡峻による「接面」の人間学における間主観的な理解の非対称性．敬心・研究ジャーナル **5**(1)，21-31.

アレン玉井光代（2015）公立小学校における英語教育－外部公私の体験を TAE で分析する．青山学院大学文学部紀要，**55**．13-28.

榎沢良彦（2018）展望　実践研究と主観性－．保育学研究，**56**(2)．124-131.

藤井真紀（2012）共感を支える「共にある」という地平－父の闘病に寄り添う体験の記述から．質的心理学研究，**11**．63-80.

福永知久・仁科伍浩（2022）保育所で紡ぐ人間関係と子ども家庭支援・子育て支援の実際

ー参与観察とエピソード記述を用いてー．鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，**26**．14-21.

Gendlin, E.T. (2004) THINKING AT THE EDGE (TAE) STEPS, The Folio, **19**.(1), 12-24.

濱名潔（2018）保育研究における自己エスノグラフィーの可能性と課題：課題を解決する工夫としての日記と TEM の活用．広島大学大学院教育学研究科紀要第三部，教育人間科学関連領域，**67**．99-108.

濱名潔（2020）複数担任クラスにおける新任保育者の子どもとのかかわりに対する意識変容プロセス 複数担任クラスにおける新任保育者のーオートエスノグラフィーによる日記の分析ー．国際幼児教育研究，**27**．55-72.

保木井 啓 史・向 井 裕一朗（2023）保育者が自分語りを振り返ることの意義．福島大学人間発達文化学類論集，**37**．33-41

井本由紀（2013）オートエスのグラフィー．現代エスのグラフィー　新しいフィールドワークの理論と実践．新曜社．104-111.

笠原広一，真木千壽子，小室明久，東南さゆり（2019）幼児の造形活動における「もの」の役割と意味について：保育園でのエピソード記述からの考察. アートミーツケア，**10**．1-17.

片岡元子（2014）保育者の「葛藤」とメンタリングに関する研究．香川大学教育実践総合研究，**28**．173-150.

勝浦眞仁・池田裕子・棚瀬佳美（2021）「きょうだいの会」における保育士の役割とは何か．医療と保育，**19**．12-23.

木下寛子（2007）雰囲気の現象学に向けてーボランティア活動の中で体験された小学校の雰囲気を踏まえてー九州大学心理学研究，**8**．22-30.

木下康二（2007）ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法．弘文堂.

小山聡子（2017）質的研究方法において研究者が自己を語ることの意味と位置ー授業研究を通して．社会福祉，**58**．69-83.

鯨岡峻（2006）ひとがひとをわかるということ間主観性と相互主体性．ミネルヴァ書房.

鯨岡峻（2013）なぜエピソード記述なのか「接面」の心理学のために. 東京大学出版会.

鯨岡峻（2013）なぜエピソード記述なのか 「接面」の心理学のために．東京大学出版会.

宮本雄太（2021）保育におけるケア行為の検討ー幼児のケア行為の特徴と表出の関連に着目してー．福井大学教育・人文社会系部門紀要，**5**．173-192.

本岡美保子（2019a）保育者の間主観的把握による情動調整場面のエピソード記述の分析ー乳児はわらべうたをどう感じいかに喜ぶのかー．教育研究ジャーナル，**24**．1-11.

本岡美保子（2019b）乳児保育における葛藤の意義ー乳児と保育者の相互作用に着目してー．保育学研究，**57**(3)．44-56.

本岡美保子（2020）「エピソード記述」における記録者の視点に関する課題についてー乳児保育場面の関与観察をもとにー．広島都市学園大学子ども教育学部紀要，**6**(2)，13-22.

本岡美保子（2021）子どもと保育者が「うたう」ようになる過程の構造：乳児保育における子どもの他者関係の構築に向けて．広島大学大学院人間社会科学研究科紀要．教育学研究，**2**．559-568.

本岡美保子・七木田敦（2018）乳児の情動調整とわらべうたの関係性ー他者関係の発達に課題があった児の継時的検討ー．幼年教育研究年報，**40**．73-82.

室田一樹（2013）保育の場に子どもが自分を開くときー保育者が綴る14編のエピソード記述ー．ミネルヴァ書房.

無藤隆（2013）実践現場における発達研究の役割：実践的研究者と研究的実践者を目指して．発達心理学研究，**24**(4)．407-416.

中坪史典（2017）保育実践と質的研究:その「質」を問う．保育フォーラム 保育学の研究方法論を考える(1)．保育学研究，**55**(3)．105-106.

野田美樹（2010）運動する意欲を育てる保育の探究ー幼児の心が動く場面を手がかりにー．愛知教育大学幼児教育研究，**15**．57-64.

岡田たつみ（2014）幼児理解への道筋ー自らの保育記録をデータとしてー．帝京大学教育学部紀要，**2**．245-251.

岡田たつみ・中坪史典（2008）幼児理解のプロセスー同僚保育者がもたらす情報に着目してー．保育学研究，**46**(2)．33-42.

岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春（2009）「エピソード記述」による保育実践の省察ー保育の質を高めるための

実践記録と保育カンファレンスの検討ー．広島大学学部附属学校共同研究機構研究紀要，**37**．299-237.
大豆生田啓友（2018）保育実践研究 その方法を探る．保育フォーラム 保育学の研究方法論を考える(2)．保育学研究，**56**(3)．229-230.
大谷尚（2019）質的研究の考え方　研究方法論からSCATによる分析まで．名古屋大学出版会.
西條剛夫（2005）質的研究論文執筆の一般技法ー関心相関的構成法ー. 質的心理学研究, **4**. 186-200.
佐藤智恵（2011）自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析ー「語られなかった」保育を枠組みとしてー．保育学研究，**49**(1)，40-50.
佐藤郁哉（2008）質的データ分析法．新曜社
サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー（2006）複線径路・等至性モデルー人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して．質的心理学研究，**5**．255-275.
田中芳美（2020）出会ったり, すれ違ったり･･･ー２歳児と保育者のコミュニケーションー．東洋英和女学院大学子ども研究，63-72.
得丸さと子（2010）ステップ式質的研究法TAEの理論と応用．海鳴社.
鳥光美緒子・北野幸子・山内紀幸・中坪史典・小山優子（1999）保育現実の分析のための方法論的検討ー津守真における転回をめぐってー．幼年教育年報，**21**．1-8.
土元哲平・サトウタツヤ（2022）オートエスノグラフィーの方法論とその類型化．対人援助学研究，**12**．72-89.
Valsiner, J., Tsuchimoto, T., Ozawa, I., Chen, X. & Horie, K. (2021) The Inter-modal Pre-Construction Method (IMPreC)：Exploring Hyper-Generalization. Human Arenas - An interdisciplinary Journal of Psychology, Culture, and Meaning. https://doi.org/10.1007/s42087-021-00237-8（最終閲覧　2023. 3. 27）
やまだようこ（2020）質的モデル生成法．やまだようこ著作集第４巻．新曜社.
山崎徳子（2010）「みんなの中の私」という意識はいかに育つかー自閉症のある中学生の自己意識の変容の事例からー. 保育学研究, **48**(1)．23-35.
山竹伸二（2015）質的研究における現象学の可能性 . 人間科学におけるエヒビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ．（小林隆児・西研 編著）．新曜社．61-117.